臨牀透析 2014 Vol.30 No.8
©日本メディカルセンター

Japanese Psycho-nephrology Conference

第24回 日本サイコネフロロジー研究会

喪失をどう受け止めるか
—高齢・糖尿・長期患者が抱える心と身体の問題—

2013年5月18日，19日
於 フェニックスシーガイア・リゾート

■ まえがき　竹澤　真吾（九州保健福祉大学）

Ⅰ．シンポジウム：糖尿病・慢性疾患・不治の病とのつきあい

1. 糖尿病患者さんの心理—喪失と受け入れ　瀧井　正人（九州大学病院）
2. 糖尿病患者さんの喪失—患者さんの語り　市丸喜一郎 他（新王子病院）
3. 病とともに生き，「人生力」を磨く人々から教わること　栗原　幸江（がん・感染症センター都立駒込病院）
4. 血液透析をしないという選択をされたFさん　久保野イツ子（ホームホスピス宮崎）
5. ディスカッションのまとめ　堀川　直史 他（埼玉医科大学総合医療センター）

Ⅱ．大会長講演：サイコネフロロジーで元気になろう！　竹澤　真吾（九州保健福祉大学）

Ⅲ．野原記念賞受賞記念講演：「透析お誕生日カード」を患者に手渡して　乗田　美可 他（独立行政法人地域医療機能推進機構千葉病院）

Ⅳ．特別講演1：仕事と人生，喪失と創造　成田　善弘（成田心理療法研究室）

Ⅴ．特別講演2：透析で40年を超えて生きてくるために心がけてきたこと　春木　繁一（青葉クリニック）

Ⅵ．ランチョンセミナー：臨床哲学の立場から，喪失をどう受けとめ，どう立ち向かうか　荒木　志朗（宗像病院）

Ⅶ．一般演題

■ あとがき　松岡　哲平（医療法人社団大誠会）

◆シンポジウム

2. 糖尿病患者さんの喪失 ―患者さんの語り

市丸喜一郎* 瀬川賀世子*

■はじめに

透析医療現場では，よく語りよく聴く文化が求められている．糖尿病と糖尿病腎症による透析患者の喪失体験と生きなおしを“透析患者さんの語りの会”の実践から考え，不治の病とのつきあい方を考える．

1. “透析患者さんの語りの会”―「患者の語り」が医療を変える

当院ではディペックス・ジャパンの活動を参考にして，54名の透析患者を対象にそれぞれの語りを収録（うち，映像付き42名），以後月1回のペースで語りの会を続けている（発表の際の映像並びに音声収録4例の書き起こしは割愛する）．

2. 糖尿病と透析

糖尿病患者にとっての糖尿病は，糖尿病をもって生きている経験を指しているのであって，糖尿病の概念とか知識，数値を指しているのではなく糖尿病は人生のストーリーの中にあるともいえる．糖尿病による諸臓器損傷はその後の人生の喪失体験を深刻なものとする．とりわけ糖尿病腎症による透析患者は導入時では1998年，総数においては2011年に慢性腎炎を凌駕した．私共の施設においてもその35％が糖尿病腎症に起因し，平均透析期間は非糖尿病群の14.7年と比較して6.6年と著しく短く，そのほか四肢切断率，失明率，独居・施設入所率もきわめて高く，認知症の増加と相俟って深刻な社会問題を抱えている．

3. 喪失体験と生きなおし

糖尿病患者は糖尿病を完全にこなし続けることに疲れ，ほんの些細なことが切っ掛けでバーンアウトすることが多い．彼らは腎機能，視力，運動機能といった身体イメージの喪失と精神的，社会的存在意義の損傷に脅えながら再生に向けた生きなおしを強いられる．生きなおしの道を模索するには，まず自分自身に優しく完璧主義を捨てることから始め，喪失体験の現実の意味とその受けとめ方，一人ひとり異なる悲哀の仕事と記憶の書き換え作業が求められる．作家は自らの生きなおしのために告白小説を書くといわれるが，誰しも己の人生体験を語り，聴いてもらえなければこれから生きていく力が湧いてこないのではと考える．

4. “かたり”と傾聴

語り聴くという物語的行為なしでは，病というできごとの意味は理解できないといわれる．“かたり”とは，“はなし”から“かたり”へ，そして物語へと展開していく過程で何らかの変容が加えられたとしても，明確な筋立てと起承転結を備えている．つまり，自分を語ることは自分とはいったい何者であるか，もう一人の自分を発見する手立てでもある．

よく聴くことには不思議な魅力があり想像力をかき立て，お互いに交流が生まれるともいわれる．傾聴するにあたっては患者の話に肯定的関心を抱き，共感的態度で臨み，指示的アプローチを避けることが肝要である．

5. 物語的医療とは

病は科学的根拠に基づいた医療だけで癒されるだろうか．患者の身体症状の訴えから始まる彼，彼女の人生体験に耳を傾けることによって今日の医療の分断に橋を架ける可能性が芽生えるとも，病と苦しみは語られなければならないともいわれる．

病と苦しみの物語を傾聴するにあたって医療者は，状況に応じた相手への配慮と表現に心を配り，その語りに参入していくことによって自らの反省と責任，義務といった論理性を問われる．

■おわりに

「過去を語り始めたら一歩前進」という喪失体験の語りは，生きなおしの道へいざなう．不治の病とともに歩むには，よく語りよく聴く医療現場の文化が必須である．“透析患者さんの語りの会”は物語的医療への一つの架け橋となる．

参考文献

1) ディペックス・ジャパン健康と病いの語りデータベース編：「患者の語り」が医療を変える．2007，ディペックス・ジャパン健康と病の語りのデータベース，東京
2) ボブ・アンダーソン，マルサ・フューネル共著，石井 均監訳：糖尿病エンパワーメント（第2版）．2008，医歯薬出版，東京
3) ウィリアム・ポロンスキー著，石井 均監訳：糖尿病バーンアウト．2003，医歯薬出版，東京
4) リタ・シャロン著，斉藤清二，他訳：ナラティブ・メディスン（物語能力が医療を変える）．2011，医学書院，東京
5) 竹中星郎：高齢者の喪失体験と再生．2005，青灯社，東京
6) 春木繁一：透析患者のこころを受け止める，支えるサイコネフロロジーの臨床．2010，メディカ出版，大阪
7) 坂部 恵：かたり―物語の文法．2008，ちくま学芸文庫，東京
8) 北西憲二，他：特集 喪失の精神療法―回復のプロセスを中心に．精神療法 2012；38：5-80

〔*医療法人財団はまゆう会王子病院（現 新王子病院）〕